

徳島市佐古の配水場

佐古の配水場

徳島県徳島市南佐古の閑静な住宅街の中に、住宅とは雰囲気の違う赤煉瓦造りの建物がひっそりと佇んでいる。この建物が、周囲の市民から『佐古の配水場』として親しまれている徳島市水道局佐古配水場ポンプ場である。

この佐古配水場内にある旧ポンプ場は、平成7年(1995)まで利用され、平成10年(1998)には有形登録文化財、平成18年(2006)にはヘリテージング100選、また厚生労働省の近代水道百選にも選ばれている。

配水場内の建物の多くが赤煉瓦をイギリス積みにした煉瓦造りとなっており、周囲の閑静な住宅街にひっそりと佇みながらも、独特な存在感を放っている。

明治時代の徳島では、赤痢や腸チフスなどの伝染病が毎年のように発生し、全国平均を上回る死亡者数を記録していた。そのような状況下にあった徳島市を近代都市に近づけるため、明治42年(1909)に当時の徳島市長が水道敷設の方針を発表した。そして17年の歳月を経て佐古ポンプ場(佐古配水場)が完成した。



写真一 集合井と旧ポンプ棟

集合井と源水井

集合井と源水井の二棟も平成10年に、有形登録文化財に登録されている。

集合井とは、池で濾過した水を集め水量を量る施設である。この集合井に溜められた水は調整池を経た後に、ポンプ場へと送られる。鉄筋コンクリートで作られた井の上に、円柱状の上屋をかぶせた造りとなっている。また、建物入り口上部の浮き彫り装飾や、壁面の柱型、窓上部の粹石等の造りが印象的である。

源水井は、第十浄水場から送られてきたきれいな水を、眉山山腹に送るためにその量を量り、調節する場所である。上屋は方形平面で集合井と同じようにパラペットや窓まわり等の装飾に花崗岩を使用している。

どちらとも旧ポンプ棟と同じように煉瓦造りになっており、全体として統一感のとれた外観を形成している。



写真二 集合井



写真三 源水井

第二^{そくとう}唧筒場

外壁には掘り込まれるように白い半円形のアーチ窓が取り付けられ、入り口部分のペディメント風の装飾が印象的であり、配水場とは思えない外観となっている。ちなみに『唧筒』とは『ポンプ』という意味である。

ポンプ室内にあるポンプは、かつては眉山山腹の佐古山配水池まで水を押し上げていた。その動力を得るために、当時としては珍しかったドイツ製のディーゼル発電機を使用していた。現在、当時使用していた発電機は置かれていないのだが、今でもディーゼル発電機は置かれている。この発電機は自家発電に用いるもので、災害などの緊急時にいつでも稼働できるように整備されている。

また、この第二唧筒場裏庭の地下には溜め池があり、平成7年に管理棟が完成するまではマンホールから溜め池内に入り清掃を行っていた。敷地内の所々に外灯のような装置が取り付けられているが、これらは清掃をする際の空気穴として活用していたという。



写真一四 第二唧筒場



写真一五 ディーゼル発電機



写真一六 空気穴

- 参考文献：1) 徳島市史 1982年
2) 徳島水道四十年史 1966年

執筆者：徳島大学大学院先端技術科学教育部 修士1年 北村征也